



Contents

- ・【巻頭エッセー】
『明日に向かって』…図書館長 古川聡 ●表紙
- ・【Parlando Interview】“ジョイ”を共有する音楽
小曾根真先生 きき手・菅野里奈 ●2～5
- ・【300号記念特集】
先生のエッセー…足本憲治 江澤聖子
沼口隆 福井敬 ●6～7
学生のエッセー…伊藤太郎 北沢彩乃
土屋憲靖 三宅彩葉 ●8～9
- 今までの表紙から
～『ばるらんど』のあゆみ～ ●10～11
- ・Information ●12

Parlando

ばるらんど 「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です



【巻頭エッセー】『明日に向かって』

図書館長 古川聡

国立音楽大学附属図書館の広報誌であるこの『ばるらんど』の歴史を紐解いてみると、1976年11月15日に第1号が、1982年11月には第100号が刊行されたことがわかる。そして今回、記念すべき第300号を出すことができた。ひと言で300号と言うものの、他大学の図書館の広報誌を調べてもここまで号を重ねてきたものは少ない。40年以上の月日かけた図書館員の努力、そして学生と教職員の皆さん、さらには大学の支援の賜物と言えるだろう。ここに深く感謝する次第である。

新しいものをつくるには、非常に大きなエネルギーが必要になる。この『ばるらんど』も同じだったであろう。従来の刊行物には不足していたものを補う存在であり、しかも新しい視点に立つものでなければ喜んで受け入れてはもらえない。そこで先人たちは、この『ばるらんど』を創刊するに当たってさまざまなことを考え、期待を込めたに違いない。各巻の目次を眺めていくと、その主たる思いは利用者と図書館との結びつきを強めることであつたと察せられる。それまでの図書館からの一方的な情報発信に留まるのではなく、学生や教職員など多様な利用者の声を取り入れながら、共に図書館をつくっていくとする姿勢が感じられる。今風に言えば、利用者と図書館がコラボすることを目指したといえるだろう。実際、“parlando”という言葉は、「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号であり、この冊子を通して図書館が利用者の方々にさまざまな語りかけをし、利用者も図書館に語りかけてほしいという思いがあつたのではなかろうか。

この『ばるらんど』が創刊された頃、私は大学で心理学を学び始めた。実験や観察、調査などの研究方法を身につけ、データを取りながら論文を書き、今こうして大学で心理学の授業を担当している。授業で先生から教えられたことを理解し、疑問が生まれると質問し、それに先生は丁寧に答えてくれた。学生の頃からの学びが今の私を作っている。ひとつひとつは些細なものであつても、先生との対話の中で積み重ねられたものは大きい。

大学の、さらには附属図書館を巡る環境はこの数年で大きく変化した。正しく言えば今も変化し続けており、過去形ではなくまさに現在進行形である。そのため私たち図書館に関わる者も、日々の変化に対応できるよう意識も変えていかなければならない。懸案であつた耐震化とともにリニューアルを果たし、図書館を運営するための骨格と言えるシステムも入れ替え、ハード面ではこれからの時代に対応できるだけの体制を整えた。残された課題は、そのようなハードをどのように運用していくかと言うソフト面である。この『ばるらんど』第300号の刊行を機に、図書館員一同気持ちを新たに次の時代に向けて努力していく所存である。これまで同様にご支援を賜りながら、大学を牽引する存在になるようますます発展していきたいと心から願っている。

●ふるかわ さとし 本学副学長・教授
(幼児教育学・教育心理)

Parlando Interview

きき手：菅野里奈(演奏・創作学科鍵盤楽器専修[ピアノ]4年)



"ジョイ、 を共有する音楽

小曽根 真 先生 (おぞね・まこと)

ジャズピアニストとして第一線で活躍する傍ら、近年ではクラシック・オーケストラとの共演などジャンルを超えた活動をされている小曽根真先生。そんな先生の音楽への想いを伺いました。

紫綬褒章受賞

— 紫綬褒章受賞のご感想はいかがでしょう。

小曽根 やっぱ、今、一番の感謝の根幹は妻ですね。そして、僕を支えて下さった方、僕を引っ張ってくれた音楽家の方、ジャズのミュージシャンたち…ここ十何年でどれほど多くの一流のクラシックのミュージシャンの皆さんに引っ張ってもらった事か、それを考えたら感無量です。僕は昔、クラシックを毛嫌いしていた一時期があった。でも今回の受賞は、ジャズとクラシックのジャンルを超えてブリッジを創った点を評価いただきました。これで今までお世話になった皆さんへ、ひとつ恩返しが出来たのではないかと考えています。僕を信じて支えて下さった皆さんに喜んでもらえる、ひとつのご褒美をいただけたのではないかなと思っています。だから、これは本当に僕が頂いたというよりも皆さんの賞だと心から思っています。

アメリカで過ごした大学時代

— 大学時代の一番の思い出をお聞かせ下さい。

小曽根 ほとんどいい思い出ばかりなのですが、実は僕は楽譜が得意ではなくて。メロディとコードがあればコード譜は読めますが、学生のコンポーザーがピアノ2段譜で書いてある曲を持って来る様な場合だと僕はダメなんです(笑)。いつも四苦八苦してかなりの時間が必要になってしまうから、先生が「オーケー。それ、ちょっとさらっとして」とか言ってきて、ピアノソロが終わったところから先をバンドで練習し始めるんです。

ある時に、いつも先生がそうしてくれるから、僕は自分から「あ、こ

こスキップしてください」と思わず言ってしまった。それが先生は気に入らなかったんだろうな。”PLAY!! We will wait”と言われたの。そして30人ぐらいいる前で、読めない譜面をこうやって1音を弾くのに10秒ぐらいかけて弾かされたんです。もう、あんな恥ずかしい思いはなかった。先生は、「いつかここはお前が通らなきゃいけない所なんだよ」とあえて恥をかかせたのだらうと思います。もちろん今は、それを感謝しています。その後、僕はわざわざ譜面を買ってきて譜読みの練習をするようになりましたから。本当は出来ていたんですよ、やろうと思う気持ちさえあれば。だけど、他の部分が弾けてるから、ここは別に出来なくていいと自分でずぼらして、そのまま放置していたから、そういう結果になったんです。

今は、学生に怒ったらダメだとか、仕事場で怒るなとか言うけど、僕は怒ってくれる人がいてくれることが幸せでしたね。

卒業してから今日に至るまで

— 卒業後のコンサートで一番思い出に残るコンサートは？

小曽根 卒業直後、カーネギーホールでデビューし、その後もいろんな場所で演奏させてもらいました。僕にとってはどのコンサートも同じくらい大切ですね。ハリウッド・ボールで1万5千人の前で弾いたことも、やっぱりすごく緊張したけど嬉しかったけれど、デイヴィッド・ゲフィン・ホール(旧エイヴリー・フィッシャー・ホール)でニューヨーク・フィルの定期演奏会に僕が出演したなんて、まだ信じられないですよ。N響さんとツアーをやる、ということだって未だに信じられないし、一昨年はN響の定期にも出演させてもらったん

ですよ。N響定期にクラシック界からピアニストとして出演するとしたら、どれだけの登竜門を通り、その市民権を得て、それで初めて出演するチャンスをいただく。それで良ければもう1回呼んでもらえるかも....みたいな、すごいレベルの世界だと思うんです。

—— 本学のSオケの定期演奏会にもご出演されてましたよね。

小曽根 あれだって僕にとっては、もう信じられない話ですよ。音大でクラシックを真面目に勉強している学生達の前でジャズの僕が出ていって大丈夫なのかなって、まあコンプレックスという訳ではないですけど....結果は最高に楽しいコンサートでした。きちんとクラシックを勉強してきている人達をバックに演奏出来るというこの喜びは。何故なら、それは本物だから。それを勉強してきている、その言葉をしゃべってきている人達と一緒にやるのが僕にとっては、やっぱり一番の勉強になるから。それはもちろんプロ、アマのオケなど、いろいろあると思うんですけど、一緒に出来るということで僕にとってはどっちもベター。コンサートひとつひとつが全部思い出です。

これは、恐らく読んだ人が元気になるかなと思うので、お話ししますが、さっきの楽譜が読めなくて恥をかいたことより、もっと打撃が大きかったことです。

バッハの生誕300周年記念コンサートでドイツのベルリンに行きました。バッハは即興の天才だったから、僕はマネジャーから即興だけやれば良いと言われて行った。当日の朝プロデューサーと話をしていたら「今日はバッハの曲は何弾くの？」って聞かれて「バッハの曲を弾くなんて聞いてないよ。僕は即興演奏をするために呼ばれた、と聞いてます」と答えたら「いや、生誕300周年記念コンサートだから弾かなきゃダメですよ。即興はもちろんしてもらうけど、その前にバッハの曲を弾いて、それに基づく即興という話なんだよ」と。「急にそんな事を言われても、僕はバッハのインヴェンションぐらいしか弾けないですよ」って言ったら「ああ、それでいい」ということになった。結果、一番弾けそうだった13番のa-mollを弾いたんです。人前で楽譜に書かれている音楽を弾くなんて経験は一度もない、しかももう10年間ぐらい弾いてないバッハを、バッハ生誕300周年記念コンサートで弾くなんて!...それで、ちゃんと弾かなければと思って、楽譜を買ってきて、夜8時の本番まで必死で練習して、とにかく暗譜。ほとんど覚えてはいたけど、もうドキドキしてしまって弾けないんです。結局、精神的なものに負けてしまったんだと思う。

この時、僕は初めて「あがる、ってということが解った。最初「ミラド」だから親指で「ミ」を弾かなきゃいけないのに、この親指が動かない。あんな経験は初めてだった。ゆっくり弾いたの、間違えないように。そして3か所ぐらい間違えたの(笑)。そして間違えた時にも間違えた顔をしたの。そうしたら、ザワザワと、なんでこんな人がバッハのコンサートに来てるの?という空気を感じた。おまけに、他のアーティストたちは全員バッハの御大家ばかりでしょ。その上、テレビ放送では、それぞれのパフォーマーの最初の3分間だけがヨーロッパ全土で放映されたんです。その後、僕は即興をやって会場のお客さんは何とか納得してくれたけど、テレビ放送ではそれが無いんですよ。きっと今の時代だったら、ネットで炎上、間違いなしでしょうね(笑)。

—— どうして断らなかったのですか。

小曽根 「ノー」と言い切れば良かったかもしれないし、あるいはその曲を使ってもいいから、自分なりに弾けば良かった。だけど、やっぱり自分もコンポーザーであるが故に、簡単にバッハの曲をジャズにするのが嫌だったんですね。バッハの曲は4声が動いて初めてバッハなんだから、あれを変えてしまったら、もうバッハじゃなくなると思ったんです。絶対に。幾らでも変えることはできるけど、変えてしまっただけは意味がない。

—— その後どうなりましたか。

小曽根 人前で、あそこまで落ちた演奏をしてしまったということ、逆に、この先は何でも出来るという位の自信がついたのかな。ただ、その直後はもう僕は二度と譜面の曲(=クラシック)は人前では弾きませんと蓋を閉めちゃったんです。

その10年後ぐらいに、新日フィルから「《ラプソディ・イン・ブルー》をやりませんか」と誘われました。それと同時にチック・コリアが「モーツァルト弾かないか」と言ってきました。どうしようかって悩んでいたら、妻が「あなたが悩んでいることは分かるけど、あのバッハの時はその朝言われてその夜だったでしょう。今回は半年あるんだよ。だから練習すればいいじゃない。練習したら大丈夫だよ」って言うてくれたんです。「じゃ、やるか」という事になって、ちゃんと練習したら今度はなんとかうまくいった。だからあの《ラプソディ・イン・ブルー》がなかったら、僕は今、クラシックはやっていないと思う。

—— そうしてクラシックに戻ってこれたのですね。

小曽根 はい、そうですね。いろいろなコンサートがあったけど、でも先程のバッハのコンサートのことで、恥ずかしい思いをしたことというのは、やっぱり皆とシェアしたい。皆さんそれぞれに、生きてきた中に、もうこういうことは思い出したくないというのが絶対あるはずですよ。でも、今、自分があるのは、それがあったからなんですよ。その悔しさとか、恥をかいたというのがあるからこそ、二度とそこに行かないように努力するんじゃないですか。

バッハのコンサートのことはやっぱり、僕が「ノー」と、その理由をきちんと言えばよかった。自分を守るためではなく、音楽的なことも



含めてね。あとは、練習不足だったら弾けないということも。やっぱりどんなに簡単な曲でも、練習時間というのが精神的なものの積み重ねになるということもそこで覚えましたからね。だから、これだけ練習したんだから、もう後はミスしたって別にいいやというぐらい練習出来ればいいと僕は思う。

クラシックとジャズの架け橋

— コンチェルトはセッションと同じでしたか？

小曽根 僕にとってコンチェルトというのは大規模な室内楽をやっている感じなんです。何をするかというと、スコアを買ってきて、スコアの全パートを自分で(キーボード)で弾いてコンピュータに打ち込んでオーケストラのカラオケを作っちゃうんです。それを聴いて練習する。そうしないと、怖くて弾けないんです。ガーシュインの《コンチェルト・イン・F》を初めて弾いた時、この曲を僕は知っていると思って、練習を自分のパートだけして行ったんですよ。そうしたら生オケで聴くと、CDでは聴こえないオーボエの音とかフレンチホルンとかがいっぱい鳴っていた。そうなると(あれ?そんなのあったっけ)と気が散って、自分のパートを間違えたりする。それからコンチェルトは全部打ち込んでやるようにしました。

— クラシックとジャズの違いはありましたか？

小曽根 ジャズとクラシックは合わせに関して違いは何もないです。ただ、リズムの取り方が、ジャズの場合はもう必ず歩くテンポのようにステディなリズムがあるんです。でもクラシックは、着地の仕方がいろいろあったりするじゃないですか。上がっていくところはエキサイトするから、テンポが微妙に行くじゃない。音符がリズムを作っていく、メロディからリズムを作るっていうの、これこそクラシックの演奏方法の醍醐味ですよ。

だけど、ジャズはそうはいかない。それをやると皆バラバラになっちゃう。考えてみるとクラシックのほうが自由なのかも。ジャズの方が型にはまる部分もある。ジャズは音符として弾く音は決まっていから自由ですけど、リズムはもう絶対的にステディじゃないとダメ。ステディなリズムがちゃんとある、その上に出来ているのがジャズで、クラシックの場合は僕から言わせるとメロディがリズムを作っている。だから、それを発見した時には(うわあ、何て自由な音楽だ)と思った。これは自由で楽しいと。その歌い方にその人の個性が出て、(ああ、この人はここでこういうふうには弾くんだ)と。

— 他に違いは感じていますか？

小曽根 即興音楽には基本的に間違いは存在しないんですよ。何が間違いかという、これやってもいいのかなと思うことが間違いなの。やってもいいかなと思う位なら、やらないほうがいい。やる!! それしかない。だから、僕がジャズ専修の皆に一番最初に言うのは、「やったもん勝ちだからね」。ただ、そこでエゴをやらないで、ちゃんと聴いた中で自分がこの音欲しいと思った時にそのまま出して出てみるんです。そうしたら、「怖くて出せないです」というのね。当たり前だよ、自分を表現する事は怖いんだよ。でも、だから楽しいんだ

よ。そんなこと言ったら、コンチェルトだっただ頭の音を弾くのは怖いでしょ。皆同じなんですよ、その怖さの種類は違うけどね。だって自分で音を出すということは、それはもう自分が責任とらなきゃいけないことだもの。

小曽根真の“ジョイ”

— 自分の音楽で一番大切にしていることは？

小曽根 “ジョイ”、喜びかな、やっぱり。芸術って形だけの高尚なものにしないで欲しい、と僕は思っています。もっと身近にいなきゃいけないものだと思う。とても近いものとしてお客さんに渡さなきゃいけないんだよ。聞く方がわざわざ勉強しなきゃ分からないような音楽は音楽じゃない。聴いてその瞬間に「ああー」と感じるから音楽なんだよね。凄いかどうかなんて、お客さんが感動の度合いによって決めればいい。

身体が生きていくために必要なものが食べ物だったら、心が生き続けるために必要なものが芸術なんだろうと思う。それを届けるという作業をする時に、絶対にお客さんに媚びてはいけないのね。お客さんが「素敵だな、これ」と思ってくれて、こちら側に引き込むためにはどうすればいいか。自分の世界に入って、自分がまず納得する音楽、自分が惚れる音色を出さなくてはならない。最初は人のためじゃない。まず自分のため、自分が感動しなきゃいけない。自分の音を聴いて涙出すぐらいの良い音が出るように魂込めて鍵盤を押す。そしてもしも自分にとって素晴らしい音が出たらその音を共有する。そこには“ジョイ”、しかないはず。

— 学生に向けてメッセージを。

小曽根 学生のうちに出来る限りの失敗をしてください。本当の自分を見つけてください。そして、レッスンに行った時に上手に弾こうと思わないで欲しい。もちろん、クラシックの場合はきちんと弾かなきゃいけないんだろうけど、でも、そこに自分ならこうするというものを出してみてもいいんじゃないかなと思う。そうすると面白いことに、その先生と自分との相性も見えてくる。だけど、そこで評価しちゃいけないですよ。先生には先生の絶対的な趣味がある。やり方がある。自分のやり方とまた違う。でも、どうしても自分は先生のように弾きたくないと思う、それは自然な事。ただ先生に要求された事ができた上で自分の弾き方をする、これは僕の目指す所。自分のコンサートになった時には、自分の弾き方で弾くべきだと僕は思う。

先生をはじめ他の音楽家の弾き方や解釈を学習することで、自分の音楽性も創れるんです。言われたことがまず出来ないと、それがいいか悪いかも分からない。だから、とにかく、学生の時に様々なことにトライ、チャレンジして欲しい。なぜなら、仕事として出演するコンサートで実験する事は出来ないから。学生のうちはまだ守られていると思うので、可能な限り、自分の限界とか、自分なりのイタズラとか、色々トライして欲しい。

そのためには、まず行動を起こさなきゃいけない。頭の中で(こうやっていいのかな、どうかな)って迷うんだったら、まずやってみてく

ださい。やって、どんな失敗をしても許される場所なんです、学校というところは。それで先生に「それ違うと思う」と言われたら、なぜ違うかをちゃんと先生に聞けばいい。ただ言われたことを「はい、そうですか」と鵜呑みにしないで欲しい。「何が違う、なぜ違う」と聞くのはすごく勇気が要るかもしれないけど、それで先生と言いあいになってもいいと思う。それでも「私はこう思います」と言って納得する

まで先生に聞いてみる。先生はそのためにいるんだから。そして、学生でいるうちに、社会に出たら出来ないことをたくさんやってほしい。もう、あり得ないほどの失敗をやってください(笑)。失敗は楽しいよ。いつの日か、それが自分だけの大切な思い出に変わるから。

— ありがとうございます(了)。



プロフィール

小曽根 真(おぞね・まこと)

1983年バークリー音大ジャズ作・編曲科を首席で卒業。同年米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び、アルバム「OZONE」で全世界デビュー。

ソロ・ライブをはじめゲイリー・バートン、ブランフォード・マルサリス、パキート・デリベラなど世界的なトッププレイヤーとの共演や、自身のビッグ・バンド「No Name Horses」を率いるなど、ジャズの最前線で活躍。また、クラシックにも本格的に取り組み、NYフィル、サンフランシスコ響等、国内外の主要オーケストラと共演を重ねる。2011年より国立音楽大学演奏学科ジャズ専修教授に就任。

2016年には、チック・コリアとの日本で初の全国デュオ・ツアーを成功させ、17年にはゲイリー・バートンの引退記念となるツアーを催行。また、11月にはニューヨーク・フィル定期演奏会に招かれ、バーンスタインとガーシュインを熱演。このライブ録音は18年3月、「ビヨンド・ボーダーズ」と題して、小曽根真の初のクラシックアルバムとしてリリースを果たす。

映画音楽など、作曲にも意欲的に取り組み、多彩な才能でジャンルを超え世界的な躍進を続けている。2018年紫綬褒章受章。

オフィシャル・サイト <http://makotoozone.com/>

小曽根先生の楽譜とCD

～当館所蔵資料より～





300号記念特集・先生のエッセー 情報過多の時代？

足本憲治

関連情報や、活動履歴に基づいたオススメが次々にスマホへ表示される現代。最近の学生は偶然の出会いに乏しい、加工された情報にばかり接し荒々しい生の情報に疎い、などと言われます。確かに、かつて図書館の索引カードをめくって起きて「全く関連しない情報」とのデタラメな出会いのような、いわば「ノイズ」との縁が減少傾向にあるなら少し寂しい気はします。

ただ、私だって道端の雑草ばかり食べて大きくなったわけでもなく、壁に貼ってあった「謎の図書館員オジンスキー氏による関連情報」やParlandoの「私のおすすめ」のような、誰かのちょっとした導きによって自身の世界が広がったこともまた大いにあるわけで…、オススメの質や場を巡る思いは尽きることはありません。

教員が学生に「教える」なんて幻想だ。出来る事はせいぜい良書を紹介することくらいだ。といった言説をかつて耳にした折、「確かにそんなものかなあ、反発している方々は怒りすぎ？」などと、ずいぶん生意気な感想を持ちました。が、その私が今や教員として、ある方向への矯正でも、一方的に何かを与えるだけでもない「導く」ことの難しさに、日々身悶えしています。

あしもと けんじ ●本学准教授(音楽理論)

十数年前のある日、妻が「失敗した…」と言いつつ帰宅しました。訳を訊けば、次のようなこと。

帰宅中の路線バス車内。誰かが手すりを盛んに叩いている。打楽器奏者の彼女には分かるそのキレッキレのリズムの凄み。「一体どんな人が？」と振り返れば、奏者は知的障害者らしき男の子で、その横では母親と思しき女性がそれを制止しつつ周囲に何度も何度も謝っている。「うちの子がうるさくてすみません…」。

我が妻の後悔は、「公衆マナーのことはさておき、あのお母さんが息子の天才性を理解していたかは疑問。彼に「君、カッコいいね。」と一言伝えればよかった。言わずに降りてしまった。」というもの。伝えていたらその子、あるいはその親子に何か新しい世界が開けたでしょうか。

本人も気づいていない「何か」を見つけ、ソツと教えてあげること。そして導くこと。私がそんな教員になれるとしたら、図書館の力が絶対に必要。そう思います。

300号記念特集・先生のエッセー 「ぱるらんど万歳！」

江澤聖子

「ぱるらんど」第300号刊行、おめでとうございます。「ぱるらんど」は毎回読むたびに、心をこめて作成して下さる図書館の方々の細やかな気配り、愛情や思いを強く感じています。すっきりと整理された内容は勿論のこと、紙質やレイアウトにこだわりながらこんなに丁寧に読みやすく、また親しみやすいものを作って下さる図書館は他にはないでしょう。個人的には新しい装丁になってからの表紙の絵の暖かみがとても好きで、癒しとしていつもバッグの中に入れておきたくなります。「館長室から」は、前図書館長の佐藤真一先生の時代からのファンで、今でも真っ先に読んでいます。学生からの「私のおすすめ」も、音楽に純粹に感動する瑞々しい感性が伝わってきて、このような学生達を育てていくことに喜びを感じています。

私の学生時代は、授業が休講になったり少しでも時間があると、すぐに図書館に行くのが常でした。静かな空間でお目当ての本を読んだり、新たな発見を探して、好奇心、期待感と共に録音目録をめくるひと時が何より好きでした。

高校生になったばかりの頃、「F・リストの作品は男性にしか弾けないのでは？女性には無理？」と考えていた矢先に女流ピアニスト、フランス・クリダの演奏に出会って、鮮烈な印象を受けました。その後すぐさまリストの作品に取りかかり、練習に夢中になったことは言うまでもありません。また図書館で偶然見つけたレコードに魅了された歌手、フランシスコ・アライサとテオ・アダムが、留学先のベルリン歌劇場での公演に二人揃って出演していた時の驚きと感激！は今でも忘れられない思い出です。在学中に図書館で得られた知識と感動が、大学卒業後の音楽人生を更に豊かにしてくれたのです。

数年前から図書館委員を務めさせて頂いていることもあり、図書館主催の講座の企画に携わっています。昨年は「ベートーヴェンとエロイカ」と題して、交響曲と変奏曲を取り上げ、沼口隆先生とご一緒させて頂きました。今年は12月に、大正～昭和にかけて出版された「セノオ楽譜」についての興味深いお話と演奏を、声楽の小泉恵子先生、品田昭子先生、ヴァイオリンの青木高志先生と共にお届けしたいと計画していますので、是非皆様にお聴き頂きたいと思っております。

えざわ せいこ ●本学准教授(ピアノ)

300号記念特集・先生のエッセー 図書館とコミュニケーション

沼口隆

図書館は静かな場所である。そうあるべきでもある。この前提からすればコミュニケーションが盛んな場所というイメージは薄いかも知れない。しかし、図書館もまた、人と人が触れあう場所である。人の関わりが持つ意味は大きい。

留学中には、ドイツ国内の幾つもの図書館を利用した。館員は全般的に親切だが、それでもちょっとした対応の違いでビクビクしたり、ホッとしたりしたものだ。初めて訪ねた施設であれば、最初に対応してくれた人の印象が施設そのものの、少なくとも当座の印象を左右しかねない。

国立音楽大学の図書館を初めて訪れたのは、他大学で卒業論文を準備していた時のことだった。所属大学からの紹介状があって、当日利用証を作って貰ったのだが、受付の対応がとても親切・丁寧だったのが印象に残っている。本学との関わりが深まったのは、当時の音楽研究所にあった「ベートーヴェン研究部門」で研究員をさせて貰った時である。当時の研究所は、学外者向けのイベントを盛んに開催していたが、それに関連した図書館展示も行っていた。

パネルを作ったり、ディスプレイを決めたりする中で、面倒な作業を嫌な顔ひとつせず、に館員の方々が引き受けて下さっていた。改めて謝意を表したい。

事務職員の野崎詩織さんは、本学で音楽学を学んだ方で、当初は図書館に配属された。新人職員の挨拶の中で、学生時代の思い出として、館員が教えてくれた資料が修士論文において決定的な役割を担ったことを紹介している(『ぱるらんど』283号、p.8)。館員は通例は研究者ではないが、日々の経験から得た該博な知識と、何よりも利用者のことを考える気持ちが、間接的にはあっても、大きな研究成果へと実を結ぶことがある。そして『ぱるらんど』もまた、利用者への思いが込められた貴重なコミュニケーション・ツールである。

館員は減り、『ぱるらんど』は薄くなった。寂しいものだ。しかし、図書館スタッフの温かみは健在だ。この大きな強みを、これからも大切にしていって欲しい。

ぬまぐち たかし ●本学准教授(音楽学)

300号記念特集・先生のエッセー

古の掛橋

福井敬

私の腕時計は、以前、父から譲り受けた物で、4、50年前の物である。手巻き式で、リュースが二つあり、一つはやはり手巻き式のアラーム用である。

毎日ゼンマイを巻かないと止まってしまうが、その毎日の動作が何かよいのである。

他の腕時計もしたりするが、またこれに戻ってくる。

このように、ひとつのものを使い続ける気質は、クラシックの音楽を生業とする私にとっては、あるべき事なのかも知れない。

私たちは、作られて何百年と経た、一枚の楽譜を再現し続ける。時代や人でその表現の仕方は変わって行くかも知れないが、ひとつの作品を慈しみ、愛し続けるのではないか。

図書館という場所も、その時代の要請に従って、常に先進的な容器を装備しないとイケないが、根本は古(いにしえ)の楽譜であり、音源であり、書物でありを、全て人の慈しみのために準備してあるべき所なのだと思う。

そして『ぱるらんど』とは、私たちと図書館、言わば今と古を結ぶ掛橋なのであろう。

私は音楽も、図書館も、『ぱるらんど』も、ずっと慈しみ続けたいと思います。



ふくい けい ●本学教授(音楽)



300号記念特集・学生のエッセー ぱるらんど300号に寄せて

大学院音楽研究科修士課程器楽専攻（ヴァイオリン）2年 伊藤太郎

今回はこのような記念号にエッセーを寄稿することができ、大変嬉しく思っている。国立音楽大学に通いはじめて6年目になるが、学年が上がる毎に図書館のお世話になる頻度は上がっており、なんとなく手に取る本にも演奏のためのヒントがあったり、ちょっとした言葉にハッとさせられたり、締切迫る(!!)論文の資料探しなどなど…いつも演奏の助けや、刺激を受けている。

この図書館には国立の附属高校3年の時から通っていて、その時からこのぱるらんどの存在は知っていたのだが、あまり手に取る機会がなく過ごしていた。

大学に入学してから2年ほどして、ふらっと立ち寄った図書館でなんとなくぱるらんどを手に取り、「私のおすすめ」のコーナーで自分もお気に入りだったCDを紹介していたことが、ぱるらんどを毎号読むきっかけになった。顔も知らない、もちろん会ったこともないこの大学の学生と、ぱるらんどを通じて好きな演奏や楽曲に対する思

いを共有できたということが本当に嬉しく、新鮮な体験だった。

当然、毎号読んでいても自分の知らない図書、CDを紹介していることの方が多いのだが、面白そうなものがあると読んでみたり聞いてみたりして、新たな感動に出会うきっかけを与えてもらっている。図書館はとても静かな空間だが、ぱるらんどを読むようになってからはたくさんの本や楽譜がタイトル通り語りかけてくるようで、図書館がとても賑やかな場所に感じ、カタイイメージがあった図書館に通うのがとても好きになった。

最近、演奏活動で忙しい中でも、積極的に図書館に足を運んでいる。特に何かを探すわけでもなく本に囲まれながら過ごす時間も、心に余裕を与え、より良い演奏への活力となっているように感じる。こんな時間も、大切にしたいかけがえのないひとときである。

いとう たろう ● 『Library Data』のコーナーは毎回必ずチェックしているのですが、「春の祭典」のスコアがいつでも上位に入っているのが興味深いです。

300号記念特集・学生のエッセー 『わたしの図書館の使い方』

演奏・創作学科鍵盤楽器専修（ピアノ）2年 北沢彩乃

図書館とは学校の中で唯一静かな空間であったように思います。私はその静かな空間が好きで、休み時間などによく図書館に通っていました。しかし、私の人生の中で読んだ本は100冊を超えるのか…。本を読もうと思っても時間がなかったり、読みたくて借りても貸し出し期間内に読めなかったりしてなかなか図書館に行っても本を借りることをしませんでした。次第に図書館に足を運ぶことが少なくなり、本もどんどん読まなくなりました。そんな図書館とは縁がなくなりかけていた時に大学に入り、大学の図書館には本だけでなく楽譜やCD、DVDがあることを知りました。

私は現在授業の空きコマの大半を図書館で過ごしています。自分の実技で扱う楽譜を借りたり、CDを借りたりして勉強しています。また、休日にはミュージカルが好きなので4階でDVDを借りて鑑賞しています。最近では新聞を読んでいて、図書館にはとてもお世話になっています。大学に入り、私にとって図書館は憩いの場になりました。

国立音楽大学附属図書館を初めて利用したのは1年生の4

月。基礎ゼミでした。図書館は本やAV資料を貸し借りする場所ですが、ライブラリーホールでは毎日たくさんの学生が勉強や談話をしています。学生たちが一番最初に図書館の利用方法などを教えていただいたのがライブラリーホールでした。図書館内の見学で一番印象に残ったことは、レポートなどで困ったときの相談に乗ってくれるということです。私は図書館について大学生になりたての時期に教えていただいたことで図書館をたくさん利用しようと思いました。これからも国立音楽大学の図書館は学生のための図書館であることを期待しています。

図書館では様々なサービスや企画・展示がいろいろな場所で設置されています。私は時々その企画を見ながら、学生にもっと図書館に足を運び、展示をたくさんの人に見てもらえればいいなと思っています。そのために私は図書館でやっている企画をみたら、友人に教えてあげようと思います。図書館で展示している企画は国立音楽大学の学生にとって身になるものばかりです。学生の皆さんにもっと図書館について知ってほしいです。

きたざわ あやの ● 大学生になってから実技だけでなく様々なことに興味関心がありすぎて友人からもはや何専攻なのかわからないといわれますが…私もそう思います。



300号記念特集・学生のエッセー くにおん図書館を使い倒せ！

大学院音楽研究科修士課程（音楽理論） 1年 土屋憲靖

はじめに、私が音楽の道に進んだきっかけの話をします。キーボードでアニメソングを弾くのが趣味だった私は、ある日、地元の図書館で和声の本を見つけました。当時はアニメソングのコード進行をよく分析したものです。それからというもの、和声の面白さに夢中になり、相互貸借を利用して和声の専門書を読み漁りました。これが私の音楽理論人生の始まりです。

もしも図書館がなかったら、私は^{くにおん}国音にいなかったかもしれません。そして今では、この素晴らしい音楽図書館をありがたく感じながら、存分に活用しています。昔も今も変わらず、私にとって図書館は無くしてはならないものなのです。

同志国音生のみなさん！この超便利なくにおん図書館をしっかりと活用していますか？今回は皆さんに、私の図書館活用法をご紹介します。

開架を漁ろう。シラバス本や推薦図書、常に新しい発見があります。音楽事典、常用です。音楽家研究の棚、レポートを書くときはまずここを見ましょう！

論文を読もう！学術論文が読めるのは、大学図書館の大きな魅力

の一つです。本には載っていない専門的な事柄や最新の研究成果など、興味深いものも多いので侮れません。既存の楽曲分析などは論文から見つけることも多いです。卒業生論文の目録、サイニー、グーグルスカラー、音楽文献目録を活用しましょう。

図書館で勉強しよう。改装前のずらりと並んだ机で、作曲の学生が熱心に課題を解いていた光景が、懐かしく思い出されます。そんな姿を見ながら、私も頑張ろうと思ったものです。改装された今でも、時折そんな姿に出会うのは変わりません。私もレポートを書くときなどは、一日中図書館にこもります。なんでもその場で調べられまし、家でやるよりも集中できるのも良いところです。そして空調代が浮きます！

レファレンス、自分ではたどり着けなかった資料を紹介されたときは聞いてよかったですと思いました！

相互貸借を利用しよう。TAC、これを使えば音楽以外も最強です。カーリルというサイトで、自治体の図書館も含めた一括検索をするのがおすすめです！

つちや のりやす ● 大パッサ、^{くにおん}「兄を扮したシンフォニア」発売だ。自作の逆行カノン(回文)です。

300号記念特集・学生のエッセー 「ぱるらんど」と私

演奏・創作学科弦管打楽器専修（オーボエ）2年 三宅彩葉

仮にも活字好きとは言えないこの私が、毎回の発行を待ち遠しく思い、今では愛読書?とまでなっているのが、この「ぱるらんど」です。

「ぱるらんど」と私との出会いは、1年次のとある授業の中でのことでした。その時の担当の先生から「この言葉を感じながらもう一度吹いてごらん」と言われ、紹介されたのがこの「ぱるらんど」に掲載された記事の中の一節でした。

そこには『君にはこの音符は何に見えるか?』『自分にはこの音符の一つ一つが大切な命に見える。不必要な命は一つだってないのだから音符も同じだよ。君は随分音を殺しているね。』音符は目で読むものではない。耳で聞いて歌うことがまず大切で、そこに心が動く息が吹きかき演奏したくなる。どんな音もパーソナリティを持った大切な『命』なのだから」といった内容のものでした。

その言葉に深く感銘し(今まで一体私は何を考え吹いていたのだろう、いや何も考えてはいなかった)と猛省したのを今でも覚えています。

そして好奇心に駆られた私は(他にはどんな記事が載っているのだろうか、どんな素敵な言葉があるのだろうか)と早速図書館へと足を運び、過去に発行された「ぱるらんど」を一気に読み漁ったのでした。

音楽的な知識や技術がまだまだ未熟な私にとって「ぱるらんど」の記事ひとつひとつが新鮮で、どれも興味深いものでした。音楽の奥深さに改めて気づき、音楽を学んでいくことを誇りにさえ思えるものでした。と同時に、何度か図書館に足を運ぶうちに、私はこの図書館という空間に心地よさをも覚えるようになっていました。

「ぱるらんど」以外にもたくさんの書籍や楽譜、CD、DVD等が揃っている図書館。それらに囲まれながら過ごす時間には、音大生であることを自覚させ好奇心を刺激してくれる何とも言えない心地よさがあります。あのたくさんの書籍や楽譜、CD、DVDなどに囲まれながら過ごす心地よさ。みなさんも是非図書館に足を運び、心地よい空間で心地よい時間を過ごしてみませんか。

みやけ あやは ● 必ず座れる通学電車の西武線！電車での時間の活用法、何か良いアイデアありましたら教えてください。



300号記念特集・今までの表紙から ～『ぱるらんど』のあゆみ～

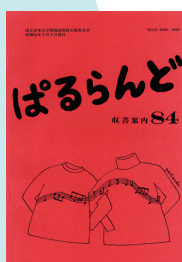
今号で300号という節目を迎える事ができました。parlandoとは「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です。この意味を大切に、次の400号刊行を目指したいと思います。これからも『ぱるらんど』を通じて、皆さまとのたくさんのお会いを楽しみにしています。40年間の『ぱるらんど』のあゆみを表紙と共に振り返ります。



46号
(1976.11.15発行)
『ぱるらんど』創刊号。
前身は1971年に創刊
された収書案内。今号
より誌名変更



128号
(1985.9.13発行)
CDが図書館資料に仲
間入り



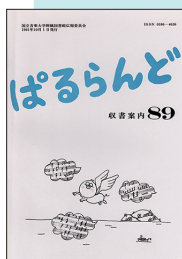
84号
(1981.2.2発行)
コンピュータ元年。カウンタ
ー業務にコンピュータ導入



108号
(1983.9.12発行)
ビデオ資料が視聴可能と
なった。それに伴い、名称も
試聴室からAV資料室に変更



150号
(1988.10.24発行)
収書案内と分離し、そ
れぞれ独立して発行



89号
(1981.10.1発行)
コンピュータ導入に伴
い、請求記号一部変
更。予約制度開始



100号
(1982.11.15発行)
100号記念特大号！



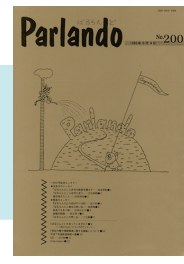
166号
(1990.11.19発行)
CDブック登場



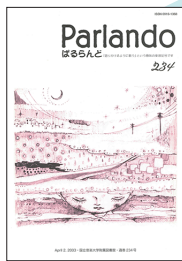
177号
(1992.6.25発行)
レーザー・ディスク、
CD-ROM導入



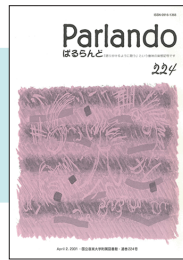
194号
(1995.4.1発行)
TACスタート。ICU、東
経、津田塾、国音の4校



200号
(1996.6.4発行)
祝200号!



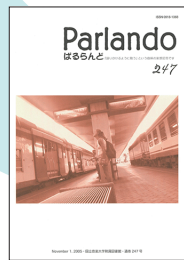
224号
(2001.4.2発行)
DVD視聴可能となる



223号
(2001.1.9発行)
TACに武蔵野美術大学
が新加盟(2000.10~)



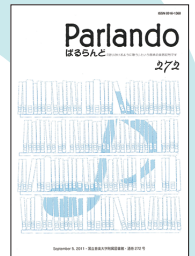
234号
(2003.4.2発行)
今号より表紙絵をムサ
ビの学生さんに依頼



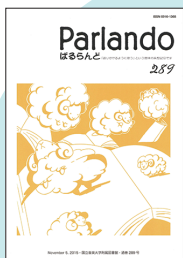
247号
(2005.11.1発行)
図書館から公衆電話
(テレカ販売機)撤去



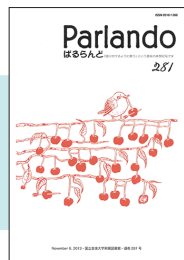
254号
(2007.4.3発行)
『ぼるらんど』の本文が
PDF化された



281号
(2013.11.6発行)
TACに東京外国語大
学加盟(2013.11~)



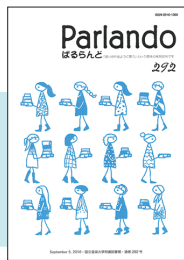
289号
(2015.11.5発行)
図書館3階、4階がリ
ニューアルオープン
(2016.1.25)



277号
(2012.11.6発行)
「くにおんアーカイブ」
公開



272号
(2011.9.5発行)
新1号館竣工記念デザ
インパネルに当館所蔵
の貴重資料の画像使用



292号
(2016.9.5発行)
図書館リニューアルフ
ルオープン(2016.11.7)



294号
(2017.4.1発行)
『ぼるらんど』リニュー
アル。A4版、オールカ
ラー、8ページとなった

図書館システムが変わりました!

今年は準備のため例年より長い夏休みをいただいていたが、いよいよ図書館システムが変更になりました。新しいOPACはもう使ってみましたか?画面の違いだけでなく、新しい機能も追加され、ますます便利に利用できるようになりました!これまで以上に図書館を活用してください。わからない時はいつでも図書館スタッフにお声掛け下さい。

夏休み前に借りた資料の返却

7月以降に借りた資料は、もう返しましたか?返却期限は9月22日(土)です。忘れずに早めに返却しましょう。

購入希望の受付が始まります

後期の購入希望受付が9月7日(金)から再開します。図書館2Fメインカウンターでお申込みください。

TAC便の夏休み明け開始は

9月3日(月)から開始しています。当館で所蔵していない資料でもTAC加盟館にある場合、TAC便を利用すれば当館資料と同じように利用できます。申込は総合受付カウンターで。

図書館活動報告**<イベント>****ライブラリー・ステージ**

図書館では、演奏という形式にとらわれず、学生に図書館をステージにして学習・研究成果を発信してもらうための、学生・先生・図書館連携企画、ライブラリー・ステージを立ち上げました。初回記念として、4階のグループ視聴室・中庭を舞台に、下記2つの作品を上演しました。

企画・上演:大学院作曲専攻(コンピュータ音楽)修士1年 関直人
『My Own Private Sight-----
EXHIBITION - NAOTO SEKI WORK FROM THE COLLECTION』
6月27日(水)~29日(金)@グループ視聴室A

『眠れない子供たちの庭』

7月25日(水) 17:20~@中庭

<展示・企画棚>**大学院修士2年有志企画!『楽譜、どう選んでいる?』**

企画:作曲専攻(ソルフェージュ)修士2年 根本晃帆、声楽専攻(歌曲)修士2年 細野愛美、音楽学専攻(音楽学)修士2年 武田有里、音楽学専攻(音楽学)修士2年 高德眞理

~第1回 そもそも楽譜出版社って、どれくらいあるの?~

6月11日(月)~23日(土)

初回は楽譜出版社について。音大生がよく使う主要な楽譜出版社の情報をまとめたリストや、ペーレンライター社のクマの変遷など、関連資料を展示しました。

~第2回 音大生はどう楽譜出版社を選んでいる?~

6月25日(月)~7月7日(土)

第2回は音大生にとって身近な楽譜出版社について。出版社選びに関する学生へのアンケート結果や、作曲家別・国別出版社の楽譜など、関連資料を展示しました。

~第3回 視覚に訴える楽譜たち~

7月9日(月)~21日(土)

第3回は「視覚に訴える楽譜」です。「現代音楽」と「音楽と美術のコラボレーション」という2つの観点から、目で見て楽しい楽譜をご紹介します。

~第4回 まだまだ見せ足りない、楽譜の知られざる世界!~

7月23日(月)~9月29日(土)

最終回は第1~3回目の内容をさらに掘り下げた展示やアンケートの中にあつた疑問についての展示を行いました。

宮澤淳一先生担当「音楽情報を集める!」図書館展示**『ロメオとジュリエット』の音楽**

~作曲家たちを魅了した恋人たちの運命~

7月13日(金)~

<大学イベント対応 @図書館>**ピアノフェスティバル 7月22日(日)**

館内に作曲家の自筆譜展示や絵本・教則本コーナー、視聴スペースを設け、フェスティバルに参加された方にお楽しみいただきました。図書館ツアーでは普段は入れない楽譜の書庫をご案内しました。

夏期受験準備講習会 8月1日(水)~4日(土)

図書館2階ライブラリーホールに受験生のための情報コーナーを設置しました。楽譜展示や視聴スペースを設け、受験生や保護者の方の見学にも対応しました。

<出張展示>

図書館では、大学イベントに合わせて会場で資料を展示する「出張展示」を行っています!

6月3日(日)

親子で楽しめる国立音楽大学ファミリー・コンサート2018@講堂

6月9日(土)、10日(日)

小学・中学・高校生のための国立音楽大学オーケストラワークショップ

@新一号館オーケストラスタジオ、合唱スタジオ

7月14日(土)

エデュケーションプログラム@講堂

7月22日(日)

ピアノフェスティバル交流会@講堂

7月31日(火)

第12回夏休み特別企画子ども見学会

@楽器学資料館ロビー

<ガイダンス>

7月4日(水) 阪上正巳先生 ゼミガイダンス

(専門ゼミIII・IV 音楽療法 4年)

■ 表紙: 山田絵未 武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科3年

■ 発行: 国立音楽大学附属図書館

■ 編集担当: 高橋京子・宮部真砂子

■ 国立音楽大学附属図書館

<https://www.lib.kunitachi.ac.jp>

E-mail info_lib@kunitachi.ac.jp